

●伝染性紅斑

平成27年の伝染性紅斑の報告数は5,409例で、前年の691例から4,718例、682.7%増加した。小児科・眼科定点報告対象13疾患総報告数156,006例の3.5%であった。定点あたりの報告数は年平均0.51で、対象疾患中第7位であった。全国集計では98,521例で、前年の32,352例から304.5%の増加を認めた。対象13疾患報告数2,431,661例の4.1%を占め、定点あたりでは年平均0.59の報告があり、第6位であった。

大阪府における週別の定点あたり報告数については、年間最高値は第28週の1.16で、最小値は第1週の0.04であった。年間の推移としては、21週以降0.5以上が続き26週から4週続いて1.00を超え、春から夏にかけて増加する例年通りの傾向がみられた。また36週以降0.5を切っていたが、47週0.94、49週0.79と冬にも増加がみられた。全国集計の定点あたり報告数でも、第28週の1.21が年間最高値で、最低値は第1週の0.10で、26週から4週続いて1.00を超えていた。また50週0.80、52週0.83と、同様に冬に増加がみられた。

月別の患者報告状況を見ると、6月が833例と最も多く、次いで11月の702例、7月701例の順であった。全国集計でも、6月が14,445例と最も多く、次いで7月の12,150例、11月10,582例であった。

過去10年間の全国報告数では、平成23年が87,010例と最も多かったが、27年はそれを上回る98,521例であった。24年は20,966例と23年に比べて著しく減少し、25年は過去10年間で最低の10,115例となっていた。26年は3年ぶりの増加を示し、本27年の報告数に至った。過去の発生動向で、19年に78,938例という比較的大規模の流行があったが、翌20年は19,257例、21年は17,281例と2年続けて減少し、22年に50,061例と3年ぶりに増加し翌23年の87,010例へ続いた。経年的にみると、本疾患は4年くらいの周期で流行する傾向がみられ、27年の増加もその傾向どおりであると考えられる。

年齢別報告数では、前年と同様に5歳の916例が最も多く16.9%を占め、4歳855例、6歳の801例と続いている。3歳から8歳までの年齢層で4,110例の報告があり、全体の76.0%を占めた。20以上の成人例は65例で1.2%と僅少であり、例年通り幼児期から学童期が好発年齢であった。

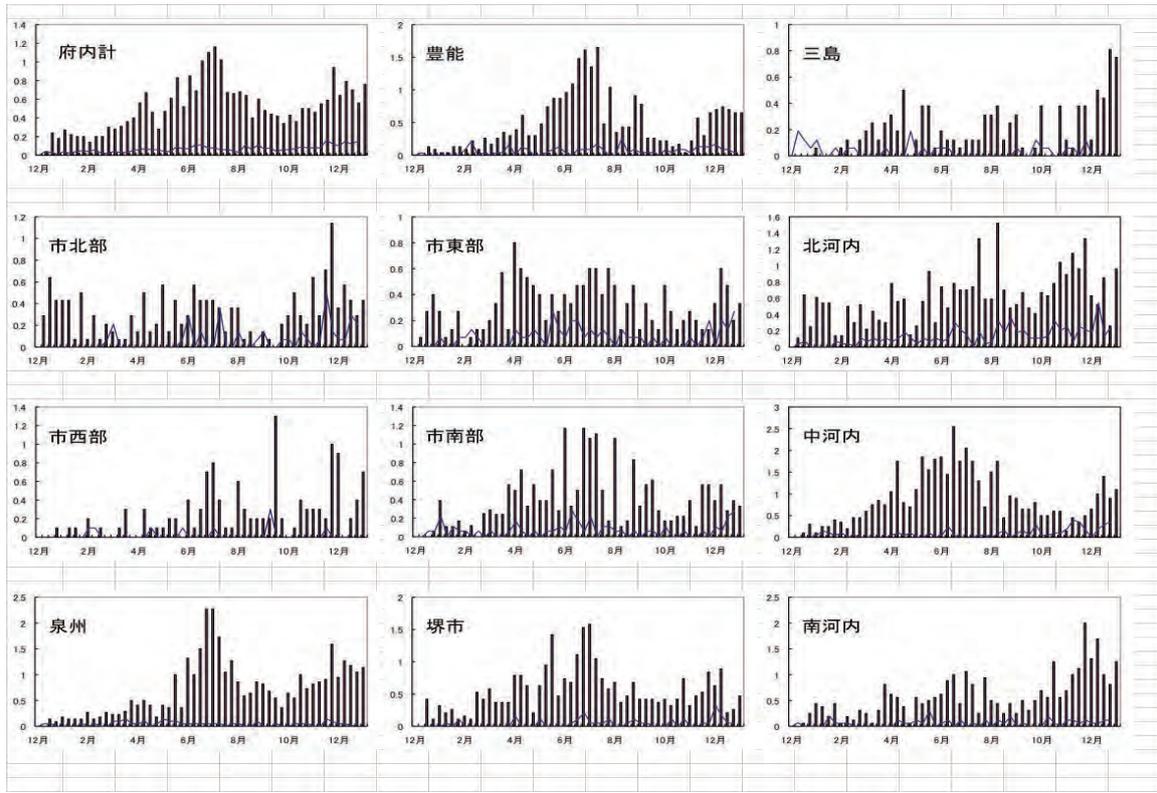
ブロック別の年間平均報告数を定点あたりで見ると、④中河内0.87、⑦泉州0.71、③北河内0.61、⑤南河内0.59、⑥堺市0.54、①豊能0.49、⑪大阪市南部が0.39、⑩大阪市北部と⑧大阪市東部が0.32、⑨大阪市西部0.25、②三島0.19の順であった。年間最高値は④中河内の26週の2.55であった。

(文責：廣川)

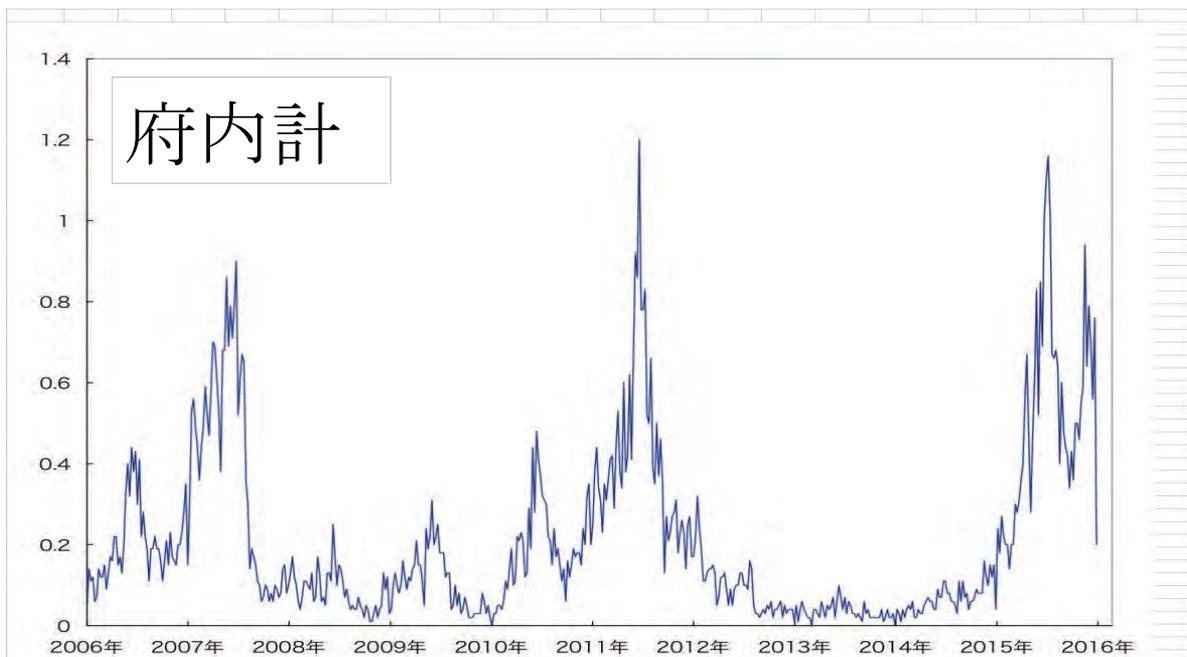
伝染性紅斑

線（H26年第1週～第52週）

棒（H27年第1週～第53週）



線（H18年第1週～H27年第53週）



●突発性発しん

平成27年と平成26年の患者報告数の比較では、平成27年の報告数は前年比0.9%減の5,491例で、総報告数の3.5%を占めた。定点あたりの報告数の年平均は0.52で順位は第5位であった。

全国的には第7位(0.51)であった。

月別(週別)の定点あたりの報告数の推移では、定点あたりの報告数は、毎月の平均と標準偏差で見ると、6月(第23～27週)が 0.70 ± 0.06 、5月(第19～22週)が 0.65 ± 0.05 と高く、1月(第1～5週)が 0.36 ± 0.13 、12月(第50～53週)が 0.38 ± 0.13 と低値であった。

全国的には6月(第23～26週)が 0.65 ± 0.03 、7月(第27～31週)が 0.59 ± 0.03 、5月(第19～22週)が 0.60 ± 0.11 と高く、1月(第1～5週)が 0.37 ± 0.12 、12月(第50～53週)が 0.37 ± 0.11 と低値であった。

年齢別患者発生数では1歳の2,679例(48.8%)が最も多く、0歳が2,159例(39.3%)、2歳505例(9.2%)であり、0歳と1歳で全体の88.1%、2歳を含めると97.3%を占めた。

ブロック別患者発生数では、定点あたりのブロック別年平均報告数の上位5ブロックは⑤南河内(0.76)、④中河内(0.73)、③北河内(0.63)、⑦泉州(0.6)、⑧大阪市北部(0.57)の順であった。下位は⑥堺(0.28)、②三島(0.28)であり、上位のブロックとは約2倍の差がある。

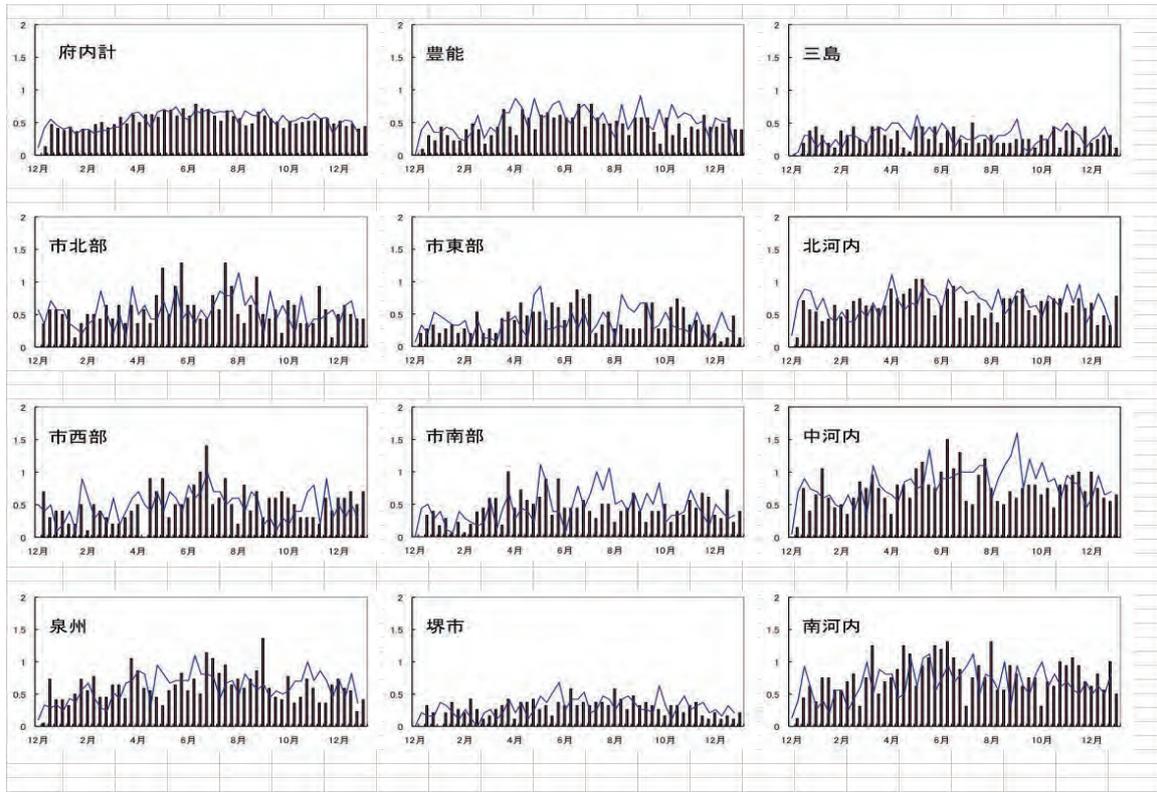
本疾患の特性としてブロック間の差が比較的生じにくいと考えられているが、上位と下位では約2倍の差があり、この傾向は過去のデータと同じである。

(文責：東野)

突発性発しん

線 (H26年第1週～第52週)

棒 (H27年第1週～第53週)



線 (H18年第1週～H27年第53週)

